

手話による
主の祈り・使徒信条



日本福音ルーテル教会
東教区障害者伝道委員会

『手話による「主の祈り」・「使徒信条」』の再版にあたって

東教区障害者伝道委員会では、これまでに“手話による”「冊子」を以下の通り発行してまいりました。

- (1) 1998 年 手話による「主の祈り」・「使徒信条」
- (2) 1999 年 手話による「礼拝式文」
- (3) 2001 年 手話による「礼拝式文― (2)」
- (4) 2004 年 手話で讃美しよう「クリスマス編 前編」
- (5) 2005 年 手話で讃美しよう「クリスマス編 後編」
- (6) 2006 年 手話で讃美しよう「受難・イースター編 前編」

さて、上記 (1) の「主の祈り」・「使徒信条」の在庫不足に伴い、同冊子の再版が必要であるとの意見が出され、牧師・ろう者・手話通訳者が共同で、改めて「主の祈り」・「使徒信条」の研修、手話表現の見直しを進め、再発行することになりました。

共同研修の中で、冊子に載せる手話表現を見直しながら決めていく作業には、喜びと同時にしばしば迷いや辛さを伴う苦労があります。同じ意味の内容でも、人によって言い方が異なったり、選ぶ言葉が異なるように、一つの手話表現が絶対ではないこと、視点やとらえ方の差異があること、今迄慣れ親しんできた手話表現、新しい手話表現による示唆……等々、複雑な要素が絡むからです。

ですから、この冊子の手話表現は一つの可能性であり絶対的なものではありません。自分なりに自分の信仰の気持ちに合った表現をして差し支えないのです。同時に、礼拝などで一緒に信仰を言い表す時には、ある程度統一された手話表現を用いることが望ましいと思われますので、一つの基本的な表現として、この冊子を活用していただければと願っています。

2006 年 12 月、第 61 回国連総会は、「障害者の権利条約」を全会一致で採択しました。この条約の中でろう者に対する最大の焦点は、「手話」は（音声言語と同等の）「言語」であることが定義されていること、手話で教育を受けたり情報にアクセスすること等が言及されていることです。

この冊子が、ろう者が「手話」という「ことば」で礼拝し、「手話」という「ことば」で信仰を表しながら、共に教会生活をしていくための助けになれば幸いです。

2007 年 12 月

東教区障害者伝道委員会

目 次

主の祈り	2
手話解説	3
補足説明	7
使徒信条	8
手話解説	9
補足説明	16

本書の構成

写 真
式文の言葉
「手話のことば」 表現説明

◇ 基本的には言葉に合わせて写真のコマが配置されていますが、手話表現の動きが続く場合には、説明文から次のコマへ矢印  で示しています。

◇ 写真につけられた矢印（例えば「     」）は手の動きを表しています。

主の祈り

主の祈りは、祈りの模範としてイエスさまが弟子たちに教えてくださったものです。そのため教会では非常に重んじられ、礼拝や集会においても、また個人の生活においても、常にくりかえし唱えられてきました。また信徒の訓練と教育にも大きな役割を果たしてきました。聖書の中では『マタイによる福音書 6 章 9～13 節』と『ルカによる福音書 11 章 2～4 節』に出てきます。

てん われ ちち
天にまします我らの父よ。

ねが な
願わくはみ名をあげさせたまえ。

くに き
み国を来たさせたまえ。

こころ てん な ち な
み心の天に成るごとく、地にも成させたまえ。

ひ かて きょう あた
われらの日ごとの糧を今日も与えたまえ。

つみ おか もの
われらに罪を犯す者を われらがゆるすごとく、

つみ
われらの罪をもゆるしたまえ。

こころ あ あく すく だ
われらを試みに会わせず、悪より救い出したまえ。

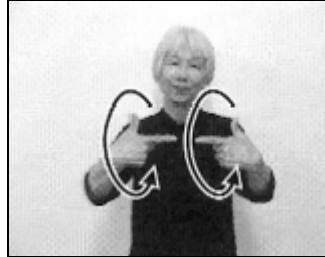
くに ちから さか かぎ
国と力と栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。

アーメン

主の祈り (1)

			
天に	まします	われらの	父よ
「天」 手のひらで 右上方に弧を描く	「いる」 両手を握り 両肘をおろす	「わたしたち」 手のひら下向き 内側に円を描く	「父」 人差指を 頬に触れ→
			
	願わくは	み	名を
「男」 立てた親指 右上方に上げる	「願う」 両手を合わせる	「神」 指文字の「か」を 右上方に上げる	「名前」 右親指を 右掌にあてる
			
あがめ	させたまえ。		み
「ほめる」 拍手をするように 両手のひらを合わす	手を広げて→	さらに上方に 大きく開く	「神」
			
国を		来たらせ	たまえ。
「国」 親指と4指を 突合せ→	左右に開きながら 閉じる (右上方で表現)	「いただく」 右上から手前に	「願う」

主の祈り (2)

			
み	こころの	天に	成る
「神」	(「神」を残したまま) 左人差指指で 片胸に円を描く	「天」	「行う」: (右上で) 両手拳を 同時に前に出す
			
ごとく①	②	③	地にも
「同じ」: (右上で) 上に向けた両手 親・人差指の→	開いたのを 同時に付け合せる	「同じ」 ①②を 正面で表現	手のひら下向き 外側に水平に 円を描くように
			
成させ	たまえ。	われらの	日ごとの
「行う」 正面で前方に	「願う」	「わたしたち」	「毎日」: 両手の 親・人差指を開き 手首を軸に回転
			
糧を	今日	も	与え
「食べる」 食べ物を口に 持っていくように	「今日」 両手のひらで軽く 押さえつける	「同じ」	「いただく」 右上方から手前に

たまえ。	われらに	つみを	犯す
「願う」	「わたしたち」	「悪」：人差指で 鼻先をなでるように 横切り下ろす	両手の人差指 左の方から自分の 方に突き出す
者を	われらが	ゆるす	ごとく (i)
「人々」：親・小指を 立てた両手をゆらし つつ左右に離す	↓ (「人々」の 左手を表し) →	「ゆるす」：右手の 拳を倒す (「人々」に向けて)	「同じ」 (正面で表現)
(ii)	われらの	つみをも	反抗
「同じ」 (右上で表現)	「わたしたち」	「悪」 + 「反抗」 →	肘をつくように 張る
ゆるし	たまえ。	われらを	試みに
「ゆるす」 (右上から自分の 方へ倒す)	「願う」	「わたしたち」	「ごまかす」 「狐」(指文字「き」) を自分に向け回す

主の祈り (4)

			
会わせ	ず	悪	より
「会う」：人差指を立てた両手を左右から近づける	「しない・いいえ」 手を左右に振る	「悪」	「から」：指先を前に向けた手を横に払う
			
救い	出し	たまえ。	国と
左手親指を右手（神の手）にのせ→	右上方に引き上げる	「願う」	「国」
			
力と	さかえとは		限りなく
「力」：拳の左腕を曲げ右手人差指で力こぶを描く	両手・指文字「え」→指を伸ばし上方に広げながら→	左右に円を描くようにおろす	「続く」：両手の親・人差指で鎖を作り右前に腕を伸ばす
			
なんじの	もの	なればなり。	アーメン
「神」	「持つ」 右上方で広げた手を握る	「です」 (右上方) 手のひらを下に向けて置く	「本当」：右手・指先上方の人差指側を顎に当てる

主の祈り・補足説明

キリスト教の「神」は、一般の「神」の手話とは区別し、指文字「か」で表します。指文字「か」を少し上方に表します。

下記 (a)・(b) は、空間に方向性や位置関係を示して、主語や「てにをは」を明確にしています。

(a) 「……天に成るごとく地にも成させ……」 (P4)

(b) 「われらに罪を犯す者を われらがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ」 (P5)

(a) 「天に成る」ですから、上方（天）の位置で「成る」と「ごとく」を表します。次に「地にも成させ」ですから、下方（地）の位置で「ごとく」と「成る」を表現します。逆に、

(b) 「われらがゆるすごとく」は、われらの行為ですから、われらの位置（下方）で表します。次に「われらをゆるし」は、神の行為ですから、神の位置（上方）から「ゆるす」を自分に向けて表現します。

「罪」は、「神に対する反抗」と解して「悪」＋「反抗」と表現しています。

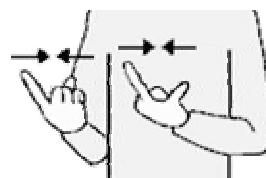
「栄光」は、最初の音「え」を指文字で示し、輝かしい様子を表しています。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

指文字「え」「か」「き」



手話「同じ」（「ごとく」）



使徒信条

使徒信条は中世以降、広くキリスト教諸教会において用いられた基本的な「信条」です。「信条」とは、聖書の教えを要約したものであり、キリスト教の信仰内容を明らかにしています。礼拝などで繰り返し信仰の告白として唱えられ、信仰養育にも大きな役割を果たしてきました。

われは、天地の造り主^{てんち つくぬし} 全能の父なる神を信ず。

われは、そのひとり子、われらの主イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ ピ
ラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰
府に下り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に上り、全能の
父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりたまいて、生ける
人と死にたる人とをさばきたまわん。

われは聖霊を信ず。また聖なるキリスト教会・聖徒の交わり、
罪のゆるし、からだのよみがえり、限りなきいのちを信ず。

アーメン

使徒信条 (1)

			
われは、	天	地の	
「わたし」 人差指で 自分を指す	「天」 手の平で上方に 弧を描くように	「世界」 両手指先を 向かい合わせ	→球を描くように 回す
			
造り	主	全	
「造る」 両手こぶしを 打ちつける	「男」 親指を立てた 右手を上にあげる	「完全」：両手のひら 下向き指先伸ばし 前方へ向け→	下に向かって 円を描くように
			
能の		父	
「できる」 右手指先を 左胸に当て→	→右胸に当てる	「父」 人差指を頬に 触れ→	立てた親指を 右上にあげる
			
なる	神を	信ず。	
「ある」 (右上方) 手のひら を下に向けて置く	「神」 指文字の「か」を 右上方に上げる	(主なる神を 心に迎える様子) →	握った右手を 左手に 包み込むように

使徒信条（2）

われは	その	ひとり子	われらの
「わたし」	「神」	「息子」 「神」から「男」を 下げて前に出す	「わたしたち」 手のひら下向き 内側に円を描く
主	イエス		キリストを
「主」	左手のひらに右手 中指で釘の跡を 指す→	(同様に) 右手のひらに 左手中指を指す	右手「男」を 左手のひらにのせ 上にあげる
信ず。	主は	聖霊によりて	やどり、
握った右手を 左手に 包み込むように	右手「男」を 左手のひらにのせ 上にあげる	「聖霊」 「神」を上方から ねじりながらおろし	「女」：小指（左手） 横に 「聖霊」を添える
おとめ	マ	リ	ヤ
「女」を 右人差指で指す	右手で 指文字「マ」	指文字「リ」	指文字「ヤ」

使徒信条 (3)

			
より生まれ、	ポンテオ		ピ
「女」のところから 「生まれる」：右手の ひら上向きを前方に	「支配（者）」 両手人差指先を 交互に前に出す	→「者」 「男」（左手）を 右人差指で指す	右手で 指文字「ピ」
			
ラ	ト	のもとに	苦しみを
指文字「ラ」	指文字「ト」	「から」：指先を 前に向けた手を 横に払う	「苦しい」 指先を曲げた手を 胸に当てて回す
			
受け、	十字架に		つけられ、
「受ける」 両手でボールを 受けとめるように	十字架の 縦棒を描く→	十字架の 横棒を描く	「イエス」の手話の (左手に右手中指) 腕を大きく広げる
			
	死にて		葬られ、
→（同様に） 右手のひらに 左手中指を指す	「死」 つけ合わせた 両手を	→横に倒す	「葬る」 左手のひらの下に 右手をもぐらせる

使徒信条（4）

			
陰府に下り、	三日		目に
左手そのままに 右手人差指を 下に下ろしていく	数字「3」を 左胸にあて→	右胸に動かす	「後」 手のひらを前に向け 前方に動かす
			
死	人の	うち	より
「死」	「人々」：親・小指を 立てた両手を揺らし つつ左右に離す	左手「人々」を そのまま、内側を 右人差指で指す	「から」：指先を 前に向けた手を 左に払う
			
よみがえり、		天に	上り、
「死」 横に倒した手を→	起こす	「天」	右手、人差指と 中指（指先下）を 右上方へあげる
			
全	能の	父	
「完全」	「できる」	「父」→	

使徒信条 (5)

なる	神の	右に	座したまえり。
「ある」 (右上方) 手のひらを 下に向けて置く	「神」	「右」 こぶしを握った 右肘を横に引く	「座る」 右手 2 指を 左手 2 指にのせる
かしこより	きたりたまいて	生ける	人と
「男」を 右上から→	手前に 下ろしてくる	「生きる」: 両手拳を握り 肘を左右に張る	「人々」
死にたる	人とを	さばきたまわん	肩の辺りから 前方下に下ろす
「死」	「人々」	「裁判」 親指を立てた 両手を→	
われは、	聖霊を	信ず。	
「わたし」	「神」を 上方から ねじりながらおろす	握った右手を 左手に 包み込むように	

使徒信条 (6)

			
また		聖なる	
「又」 人・中指の2指を →	振りおろすように	「美しい」 左手のひら上を右手の ひらで、なでるように	右へ動かす
			
キリスト		教会・	
「イエス」: 左手の ひらに右手中指で 釘の跡を指す	→同様に 右手のひらに 左手中指を指す	「教会」 両手の人差指で 十字を作る→	「家」 両手で 屋根形を作る
			
聖	徒の	交わり、	罪の
「美しい」	「人々」	「交流」: 両手上下 におき互い違いに 水平に動かす	「悪」: 人差指で 鼻先をなでるように 横切り下ろす
			
	ゆるし、	からだの	よみがえり、
→「反抗」 肘をつくように 張る	「ゆるす」: 右手の 拳を (右上から) 倒す	「体」 手のひらを 体の前で回す	両手のひらを合わせ 横に倒した手を→

使徒信条（7）

			
	限りなき		いのちを
起こす	「続く」（永遠） 両手の親指 人差指で鎖を作り	→右上に伸ばす	「命」 右手拳を 左胸にあてる
			
信ず。		アーメン	
握った右手を 左手に 包み込むように		「本当」：右手・ 指先上向の人差指 側を顎に当てる	

使徒信条・補足説明

1998 年発行冊子では、式文の新しい訳を採用しましたが、今回は、式文の文語訳を採用しました。

十字架にかけられた釘の跡を示す「イエス」の手話は共通した表現ですが、この冊子では、キリスト教用語といえる、例えば、「信仰」「罪」「赦し」「救い」「栄光」「永遠」「聖霊」など、諸教派とは少し異なった手話表現も見られることでしょう。

例えば、「信ず」：主なる神を私の心の中に受け入れる「信仰の心」を表現

「聖霊」：聖霊なる「神」が降られる様子として表現

いずれも、研修と話し合いを重ね、与えられている信仰の心に裏付けされながら、決めてきた表現です。

「ポンテオ ピラト」は人名ですが、総督としてのピラトの立場から、「支配者ピラト」の表現になっています。

1998 年発行冊子では、「全能」を「完全・全て」+「力」+「もつ」と表現しましたが、今回の見直し研修で、「完全」+「可能・できる」との表現になりました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

指文字「マリヤ」



「ピラト」



あとかき

本冊子作製のための研修会を4月に行い、作業の取り組みを決めました。

今迄、冊子発行の実務を担当下さっていた委員が他県に転出され、この仕事を引き継いだ者は、暗中模索、右往左往しながら遅々とした作業になりました。

写真では動きを表すのに限界があることや、写真スペースが小さく、細部が見にくいなど、難点や要改善面は多々ありながらも、こうして発行にこぎ着けましたこと、感謝いたします。

このために、労を共にしてくださった小石川教会牧師、ろう者、手話通訳者、そして、ご協力くださった方々に心より感謝を申し上げます。

全国の皆様のご意見やご感想を聞かせていただけると幸いです。

2007年12月

東教区障害者伝道委員会

連絡先 **日本福音ルーテル小石川教会**
〒112-0011
東京都文京区千石 2-30-13
TEL 03-3941-4172
FAX 03-3947-9621